

2026

3

令和8年3月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻391号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とあるおの



あーれおのり



公益財団法人
さわやか福祉財団

大好評!

助け合い体験ゲーム

地域のニーズ（困り事）とその担い手の発掘など
助け合いを疑似体験できるゲームです。

SC・行政など関係者の研修から小地域での住民勉強会まで、
さまざまな場面で全世代が楽しく参加できます。

アイスブレイクにも最適です。



ぜひご活用
ください!

電化製品の
アドバイス

一緒に
体操をする

通院・買い物
などの送迎

入浴介助

居場所の
運営スタッフ

活動団体での
リーダー

地域の情報
交換会の立上げ

動画

「助け合い体験ゲームの活用方法

—助け合いのある地域づくりをはじめよう—



(動画画面より)

ゲームの基本的な使い方、効果的に行うためのポイントなどが満載です。

財団HPトップページ

→「ライブラリー」→「各種広報ツール」

→「動画」でご覧いただけます

【動画視聴 URL】 <https://www.sawayakazaidan.or.jp/library/tasukeaigame/>

「助け合い体験ゲーム」は1,100円（消費税込・送料別）で頒布しています。
お問い合わせは当財団（電話：(03) 5470-7751）まで

ともあそび

2026年3月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

企業とのつながりをどうする？

企業フィランソロピー大賞の取り組みから

清水 肇子

4 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

枠組み、ビジョン、理由はない

境界のない居場所で、目の前の人につき合い続ける

NPO 法人泉の会（静岡市清水区）

10 いきいき わくわく 子どもと一緒に地域で輝こう

言語も国籍も越えて、みんなで楽しく支え合おう

Relaxing Place for All Moms and Dads in Japan（RMJ）（東京都葛飾区）

20 シリーズ 定年、その先へ ー地域とのつながり方 11

企業人と地域人の本音が交じり合う

「地域プロデューサー講座」の現場から

一般社団法人定年後研究所長 池口 武志

新しいふれあい社会づくりに向けて

16 「地域助け合い基金」

助成先のご紹介／状況のご報告

24 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）
ご寄付者の皆様のご紹介

25 NEWS & にゅーす

27 活動日記（抄）

15 「ともあそび」を始めませんか？

22 財団ツール紹介

39 みんなの広場 / 投稿募集

企業とのつながりをどうする？ 企業ファイランソロピ―大賞の取り組みから

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

去る2月17日（火）、東京の如水会館で開催された「第23回企業ファイランソロピ―大賞贈呈式」に出席した。この賞は、公益社団法人日本ファイランソロピ―協会が2003年に創設したもので、以来20年を超えて毎年、大賞と入賞企業数社が顕彰されている。対象は、「社会の課題解決のために、自社の経営資源を有機的・持続的に活用した社会貢献活動」とされており、今回の受賞企業は次のとおり。

企業ファイランソロピ―大賞

株式会社海産物のきむらや（鳥取県境港市）

対象活動：境港市・伊平屋村（いへやそん）教育交流事業

企業ファイランソロピ―賞（企業名50音順）

ブランドdeサポート賞 株式会社ゴールドウイン（東京都港区）

対象活動：チャリティTシャツで障がい者クライミングの普及活動を支援する取り組み
支える人を支える賞 日本イーライリー株式会社（兵庫県神戸市）

対象活動：ヤングケアラーリエゾンプロジェクト（ヤングケアラーを取り巻く環境改善

に向けた取り組み

シチズンシップ醸成賞 浜松いわた信用金庫（静岡県浜松市）

対象活動：人と時代をつなぐ花のリレー・プロジェクト

未来をつくる地域インフラ賞 株式会社ファミリーマート（東京都港区）

対象活動：ファミリー（家族）の未来を担うこともたちを応援する取り組み

選考委員として関わったが、惜しくも受賞には至らなかった先も含めて意欲的な活動内容の数々で、選考委員会では議論が白熱した。いろいろな表彰・顕彰の審査に関わらせてもらう機会があり、それぞれに特長があるが、本賞の特色の一つは、選考のポイントに経営理念との関連を明確に挙げていることだろう。そのため選考過程では、書類審査に加えて、選考委員が分担して個別の訪問調査（ヒアリング）にも出向く。社長など経営トップ層にも直接話を聞き、活動目的や理念、経営資源（人材、ノウハウ、技術、情報等）の活用等について確認する。

今、全国で取り組まれている地域づくりでは、生活支援体制の強化に向けて、多様な主体との連携を図ること、特に企業との連携促進が求められている。しかし、一方、企業へのアプローチはハードルが高い、どのように働きかければよいかかわからない、という戸惑いの声も少なからず寄せられる。介護・医療分野をはじめ高齢者の暮らしを支える事業を展開する企業へのアプローチは有効であり、そうした事例が各地で発信されつつある。そして、さらに新しい糸口を考えるとき、分野を超えて地域の中で広く情報を集めてみてはどうだろうか。今回の受賞各社は、まさに住民やNPOを含めて多様な主体と組み、連携して活動を展開していた。

高齢分野とは一見違っても、地域課題を共に解決しようという思いが共有できれば、きっと新しい取り組みへの可能性が広がる。そんな気持ちを与えてくれた企業の皆さんだった。

広げよう つなげよう 地域助け合い

活動の現場から



枠組み、ビジョン、理由はない 境界のない居場所で、目の前の人につき合い続ける

NPO法人泉の会（静岡市清水区）

温暖な気候に恵まれた静岡市南東部の清水区で、35年以上支え合い活動が続けてきた「NPO法人泉の会」。現在は、シェアハウスのほかに多世代が集う居場所「きてこ」「寄ってっ亭」「こどもっ家」を運営。制度や枠組みに縛られず、目の前の人につき合い続けてきた姿を取材しました。

（取材・文／境 朗子）

「生牡蠣をここでフライにしてもらってうれしい。みんなで『食べたいね』って話してたのよね」「そう。ランチのおかずに入れてもらってよかった」

ここは「NPO法人泉の会」が運営する場の一つ、「みんなの居場所きてこ」。平日昼間にみんなでお昼を食べ

ようというのが主な目的だ。取材した日も、近くのデイサービスに行った帰り、シニア女性数人のお仲間がいつものように立ち寄って、ランチタイムを満喫していた。高齢になり、家で揚げ物をするのはちょっと心配。そんなときは「きてこ」に食材を持参して調理

を頼めば大丈夫だ。参加者の80代女性は持病があるが、「ここでご飯を食べたら、別棟の『寄ってっ亭』に行きま



「寄ってっ亭」と「こどもっ家」が同居する泉の会の建物

す。編み物をしながらおしゃべりする時間は最高ですよ」とご機嫌な様子。

その「活き生きサロン寄ってっ亭」は、それぞれが自分好みのひとときを過ごせる居場所だ。人の気配を感じる空間で、読書をする人、折り紙を楽しむ人——、誰でも立ち寄れる。10年越しの常連の女性は楽しげに「私にとつてここは、愉快な所、楽しい所、憩いの場ね」と、歌うような口調で教えてくれた。

「毎日来たい」「じゃ、そうしよう」

泉の会が発足したのは1989年。介護保険制度開始よりずっと前のことだ。代表の藤下品子さん（83歳）が義父を介護した経験から、地域の支え合いが必要だと感じたことがきっかけだった。

「義父を見送った後、市社会福祉協議

会のボランティア

養成講座に参加しました。そこで同じような思いを持つ方々と出会い、

『住み慣れた家に最後まで住み続けたい。そのためには介護を一人で抱え込まず、みんな

考え、活動していこう』と話し合ったのです」（藤下さん）

たまたま持ち家に空き家があったことから、近隣で見守り等が必要な高齢者を預かる活動を始めた。遊びを取り入れたリハビリ「遊びリテーション」

などを行い、週1回程度開いていたら

「毎日来たい」という声が上がリ、「じゃ、そうしようか」と開催日を増やした。利用者が増えるにつれ、家族や本人との間で、さまざまな支え合い

のかたが生まれていった。



カキフライを入れてもらった「きてこ」のランチ



「きてこ」でのランチタイム。奥で見守るのは藤下さん

あるとき、近隣で認知症がある義母を介護していた女性が「限界です。私はパートを辞めるしかない」と藤下さんに訴えた。「仕事は、気持ちを発散できる大切な場。私たちがみるから辞めないで」。

もともと藤下さんと顔見知りだった



事務局の三浦さん（左）と
泉の会代表の藤下さん（右）

そのお義母さんは、泉の会に通っては来るものの、すぐに自宅に帰りがたがる。藤下さんは無理に止めず、一緒に歩いていく。しかし自宅は施錠されドアは開かない。そこで「私の家に行こうよ」と明るく誘うとついてきてくれる。その繰り返しだった。後日、女性から「おかげさまで仕事を続けています」と感謝の言葉が届いた。そんな明るい言葉こそ、藤下さんたちにとって何よりのご褒美だった。

藤下さんは95年、自宅敷地内に宅老

所を開設した。

2000年には介護保険制度がスタートし、藤下さんたちが「もう私たちがボランティアで続ける必要もな

いから、会を閉じようか」と話し合っていたら、利用者たちが「ここじゃなきゃ行かないよ!」と強く主張した。「じゃ、続けなきゃならないかな」。

そう考えた藤下さんは泉の会をNPO法人とし、介護保険のデイサービス事業を始めた。しかしその後も、「お葬式があるからおばあちゃんを預かってもらえないか」と頼まれればもちろん「いいよ」。火事で焼け出された高齢者に「行く所がない」と訴えられると「部屋が空いていたはず」。

「最期までこの宅老所にいたい」と望む人は増え、藤下さんはこれまで15人ほどを看取ってきた。「夜、1人だと寂しい」と言われれば、自分の寢床を用意して同じ部屋で寝た。喘息気味の藤下さんが咳込むと「大丈夫?」と、か細い声で気遣ってくれる人もいた。

08年には常設の居場所「寄ってっ亭」が誕生した。

「制度に縛られず、誰でも、毎日でも気軽に立ち寄れる。そんな居場所が求められていると感じたのです」（藤下さん）

子どもたちに 頼れる大人がいて安心できる場を

泉の会は、16年に生活困窮者の一時生活支援を開始したが、困窮する人の多くは、働き盛りなのに生活する力に乏しく、生きていくのが大変な人たちだった。話を聞く中で、子どもの頃の家環境が大きく影響していると感じ、子どものうちからの支援が急務だと思った藤下さんは、市社協の平井祐子さんに相談。17年、ボランティア募集など市社協の協力もあり、「寄ってっ亭」と同じスペースで子どもが過ごせる「こどもっ家」を始めた。

「こどもっ家」の中心スタッフ、主任児童委員の渡部恵美子さんは、「子ど



「こどもっ家」の渡部さん（左）と調理担当の木村さん（右）

がいることを伝えて、子どもたちが安心できる場にしたかった」と力を込める。平井さんは「繊細すぎて、学校でやるべきことが完璧にできない自分を責めてしまう子でも、ここなら『あなたのこういうところがいい』と肯定してもらえます」と語る。

「勉強は、したくなかったときでいいので、コミュニケーション力をつける場として『こどもっ家』に来てほしい。

『いろいろな人がいるから、まず来てみて』と呼びかけています」と渡部さん。

も会がなくなり、集団遊びも減って、不登校が目立ち始めた時期に『こどもっ家』がスタートしました。地域

親へのサポートも大切で、SNSでやり取りをしたり、ときには「こどもっ家」で話をすることもある。元教員の渡部さんは「こどもっ家」は私にとっても大切な居場所。言うべきことは言うので子どもたちに『辛口おばさん』と呼ばれたりするんですよ」と笑う。

取材当日、「こどもっ家」にいた2人の小学生がお昼前に「給食を食べる学校へ行く」と出かけていった。「こどもっ家」が学校と連携し、好きなメニューが出るときだけでも登校できるように調整したそう。ここでの同世代のおしゃべりをきっかけに、外へ遊びに出るようになった子もいる。

「手厚い福祉制度も大切ですが、近所の子と遊んだり、いろいろな人たちと交流できる場が大事」と渡部さん。

清水区港南地域包括支援センターの市川文彦さんは、地域と距離を置いていた高齢男性のことを教えてくれた。



「こどもっ家」で遊ぶ子どもたち。小さい子も大きい子も、「寄ってっ亭」の人たちも一緒



木村さんと一緒に、小学生もイワシの下処理

特技のバルーンアートを「こどもっ家」で披露してもらったところ、子どもたちにも大ウケ。

「ご本人にはとても励みになったようです」

男性は、その後も「こどもっ家」を楽しみに訪れるようになったという。

「寄ってっ亭」などに集う高齢者は、あいさつが苦手な子どもにも根気よく「おはよう！」と声をかけるので、しぶしぶ返事をしていた子どもいつの間にかしつかり声が出るようになる。親でも先生でもないけれど、「靴はそろえようね」と教われれば素直にそろえる。編み物をしているおばあちゃんぐの横に座って、「やってみたい」とつぶやく子ども。やがて、ちよっぴり得意げな表情で高齢者にスマホの使い方を教えてたりもする。

「こどもっ家」には大学生以外にも、かつて通っていた小学生が中学生になつてから土曜日に来てくれることがある。「一緒に遊ぶだけです、それが大事なのね」と藤下さんは微笑む。

困っている人が来たらつき合う その繰り返し

泉の会の常駐スタッフは、藤下さん

の娘で事務局の三浦香織さんと、調理担当の木村順子さんの2人だ。

木村さんは「友人に誘われて、厨房を手伝ったのがきっかけです。家ではインスタントやレトルトの食品を食べているというお子さんが、『味噌汁おいしい』と目を輝かせてくれるのは、私の心の栄養です」と話す。同居している母親の体調が心配なときは、一緒に連れてくる。「母も機嫌がよくなります」

三浦さんも「今日も、一

人暮らして普段は料理をされない方が『きてこ』でみんなと一緒に食べたいと、家で玉子焼きを作ってきてくださいました。食を通してコミュニケーションの楽しさを実感されるなど、皆さんの変化する様子がうれしい」と笑顔で語る。



地域包括支援センターの市川さん（左）と
市社協の平井さん（右）

スタッフは2人だけだが、不便はない。そのときその場でみんなが、配膳片づけ、掃除など、必要なことを自主的にやるからだ。

泉の会スタート当初、ボランティアで参加していたのが佐藤佳江さん（85歳）。「参加者の好きな料理をよく一緒に作ったりして楽しかったですね。病気をして今は参加者として来ていますが、のびのびできて言いたいことは何でも言えます」と、晴れ晴れとした

表情だ。

市社協の平井さんは「泉の会さんには制度とか枠組みがあるから何かするのではないんですね。目の前の人困っている、あるいは困るだろうなど思ったら手伝

う。それが活動になって、後から制度やサービスが追いついてくるのです」

藤下さんは「困っている人が来たら、それにつき合う。その繰り返しですかねえ。居場所も来たい人が来て好きなことをやる。そうすると何かできちゃっているわけ。もし役目を終えたらやめればいいだけ。それは停滞ではない。よく『ビジョンは？』『苦労したこと』と聞かれますけど、ないんですよ。新しく居場所をつくりたい人は私と話で気が楽になって、始めちゃうみたいですよ」とおおらかに笑った。

境界のない居場所づくりへ 原点回帰

今や静岡市内に250か所以上ある高齢者のための「S型デイサービス」も、発祥は泉の会だ。「S」は、小さな集まり（スモール）、清水、静岡の頭文字。ボランティアが中心となり、

身近な場所でミニデイサービスを実施する。

一方、泉の会は昨年3月、介護保険事業としてのデイサービスを終了した。

「制度による介護施設も増えましたから、私たちは手作りの昼食を近所の人たち同士で食べてお話しすることを何より大事にしたい」と藤下さん。それは「原点回帰」への決断だった。

「高齢者も子どもも障がいのある人も過ごせる、境界のない居場所づくりに力を注ぎたい」

支え合う地域へ自然体で取り組む泉の会の活動は、これからも続いていくだろう。



1989年、家族介護者の課題を念頭に支え合いの必要性を感じ、「住み慣れた地域で暮らす」をテーマに活動開始。2000年、NPO法人格を取得し通所介護指定事業者となる。昨年度で介護保険事業を終了し、現在は多世代が集う居場所づくりを柱に、「みんなの居場所きてこ」「活き生きサロン寄ってっ亭」「こどもっ家」「シェアハウス」を運営している。

<きてこ> 食事を囲みながら自由に過ごす、高齢者を中心とした誰もが立ち寄れる居場所。月～金10～15時。ランチは火～金11時30分からで1食500円

<寄ってっ亭> おしゃべり、手芸、卓球等を通じた自然な交流の場
月～土曜日9～15時

<こどもっ家> 子どもの居場所。月～金10～15時は不登校児対象の「常設こどもっ家」、月2回土曜日も開催。参加費300円

●連絡先／NPO法人泉の会

〒424-0841 静岡県静岡市清水区追分3丁目5-17

TEL：054-367-2878 メール：npoizumi3@yahoo.co.jp

いいきき わくわく

子どもと一緒に
地域で輝こう



言語も国籍も越えて、
みんなで楽しく支え合おう

Relaxing Place for All Moms and Dads in Japan (RMJ) (東京都葛飾区)

RMJは、「日本にいるすべてのママにとって、癒やされる場所」という意味。さまざまな言語・国籍のママたちが集いやイベントを企画し、親も子もみんなで楽しみながら活動して、孤立し困っている外国人親子の力にもなっています。

(取材・文／森 祐子)

● フリマで楽しく 日本で暮らす外国人の困り事を理解

土曜日の午前中、東京都葛飾区にある団地の集会所を訪れると、RMJが主催するイベント「せかいのことはマーケット」というフリーマーケットが開催されていた。訪れていたのは、近所に住む日本人親子や外国人の親子。

会場には子ども服がサイズごとに陳列され、おもちゃや絵本なども出品されていて、すべて100円で購入できる。品物を選んで会計に行くと、



フリマの間、
ママ同士で子どもを見守り

「買い物用語カード」を
介して会計係のママと会話





左から、アンジェリークさん、アスマさん、荻原さん、クリシュナさん



RMJ代表の室井さん

会計系の外国人ママが「ケニアルワンダ語」「ヒンディー語」「アラビア語」などさまざまな言語で書かれた「買い物用語カード」を見せてくれる。購入する人はその中から一つ選んで、書かれている言語の読み仮名を読む。堂々と読み上げる子もいれば、気恥ずかしそうに読み上げるママなど反応はさまざまだが、言葉が通じて買物を終えると、「今体験していただいたことは、日本語が十分通じない人たちが、日々感じていることです」

というイベントの趣旨が書かれた紙がスタッフから手渡される。

ケニアルワンダ語をハキハキと読み上げていた杉浦颯太くん（5歳）は

「ドキドキしたけど、ちゃんと言えて楽しかった」と笑顔だ。

このフリマは外国人ママに活躍してもらうとともに、日本で暮らしている外国の人たちが日常的に感じている不便や不安を来場者が理解できる場になっていた。購入を終えたテチアナさん（33歳）は、7年前にウクライナから移住してきた。

「RMJのイベントに来ると外国人同士で話せるし友だちもできるので、2年前からよく参加しています。RMJと出会って日本での生活が楽しくなりました」と話す。

この日、会計係をしていたのはルワンダ出身のアンジェリークさん（30歳）、インド出身のクリ



RMJのイベントにはよく顔を出すという杉浦さん親子



テチアナさん親子

シユナさん（36歳）、バングラデシユ出身のアスマさん（28歳）だ。「RMJに来ると、子どももママも楽しく交流できるし、ごみの出し方などの細かいルールを日本人ママに教えてもらえて助かる」と笑顔で答えてくれた。

この日は、2時間ほどの開催で11か国・60人ほどの親子が訪れたそうだ。

●あるフィリピン人ママとの出会い

RMJは2022年3月、代表の室井萌さん（42歳）が外国人ママたちの交流を目的として一人で立ち上げた。現在の登録メンバーは葛飾区に住む人を中心に92人で、そのうち運営に携わるメンバーは11人。オンラインコミュニティの運営と、イベント開催を中心に活動している。

最初のきっかけは、室井さんの子どもが1歳だった頃。区内で保育士をしている室井さんの妹から「英語しか話せなくて困っているフィリピン人のママがいる」と相談されたことだった。室井さんは英語学科卒業で英語が話せたので会ってみる

と、彼女は、自国ではバリバリ仕事をしていた人だったが、来日して日本語が分からないために幼い子どもを抱え誰とも会話できず、孤独な日々を送っていた。

「近所に住む英語が話せるモンゴル人のママを紹介することも考えましたが、それでは根本解決にならないと思いました」

外国人で英語を話したいママはもっとたくさんいるだろうし、日本人で英語を話したいママもいるはず。

それなら、英語で外国人ママと日本人ママが交流できるボランティアサークルはないだろうかと考えて区社会福祉協議会に問い合わせ



RMJでは、外国人メンバーの親子のために小学校入学ガイダンスも実施。細かい資料を作成して喜ばれたそう



地域の盆踊りに参加したRMJの皆さん。浴衣は、着付けのできるメンバーが持っているものを貸してくれたりした

たが、そういうサークルはなかった。ただ、そのときの区社協職員の「室井さんがサークルをつくられたら？」という言葉が心に残った。

動き出して間もなく、活動資金にと生協の助成に応募してみたところ、助成金が下りると同時に生協側から「すぐいい活動なので、ぜひ頑張ってください」と励まされ、室井さんのやる気につながった。

まずは区内の団地に住む外国人ママ同士をつなげる集会を開催しようと考え、ポスターを作って掲示板に貼り出し、インスタグラムでも告知した。また、LINEで外国人ママの困り事無料相談も開始した。

9月に初めての集会を開いてみたところ、フィリピン人、モンゴル人、台湾人、日本人など5、6人が集まって交流できた。以来、月1回第3月曜日の「平日の会」など集会を開き続けている。それ以外にも、浴衣を着て盆踊りに参加したり、今回のフリマのようなイベントも積極的にやってきた。イベントに集まってきた外国人ママたちが

情報交換をしたり、楽しみながら日本文化に触れたり、日本人ママに相談したりするきっかけになる大事な機会だ。

「私の住む地域では外国人が急増していて、私たちは外国人の子が日本の小学校で困らないように支援したり、いじめの問題で学校との話し合いを仲介したこともあります。もう少し行政に頑張ってもらいたいと思うけれど、まずは、私と同じように幼い子どもを抱えて、今、困っているママたちとつながりたいと思ったのです」と室井さんは振り返る。

● 多彩なメンバーが活躍

初期の頃は室井さんがイベントを企画していたが、徐々に他のメンバーに任せられるようになった。「メンバーは私を手伝ってくれる人たちではなく、自ら情報を探して、この活動に興味を持って集まってきてくれたやる気のある人ばかりです。みんな、さまざまな企画を積極的に立ち上げてくれますし、私の妹はLINEの無料相談を担当してく

れています。ほかに運営管理が得意な人などいろいろし、RMJの社会的意義などを話し合いながら一緒に活動してくれる存在です」と室井さんは話す。

今回のフリマ企画を担当したのは、荻原佳奈美さん（35歳）。荻原さんは英語留学した経験を生かしたいと思っていた。育児休暇中にネット検索でRMJを見つけ、自分も子育て中なのでピタリだと思った。毎月開かれる集会上子どもと一緒に参加しているうちに



「せかいのこばマーケット」に参加したRMJの皆さん

.....
スタッフとなった。今回の企画は室井さんのアイデアを基に、会計係を担当する外国人ママへの説明や、その人たちが話せる言語での買い物用語カード作りなどを担った。

買い物用語カードのデザインは、ウェブデザインの仕事をしている永田摩耶さん（41歳）が担当。各国の国旗の色をイメージしてデザインした。永田さんは、子どもが小さい頃に夫を事故で亡くし、たくさんの人に助けってもらったという。「そのときの恩を、私で止めてはいけないと思ったんです」と語り、「恩送り」のためにRMJの活動に名乗りを上げた。ママと一緒にRMJに参加する子どもたちにとっても、幼い頃からこのようなコミュニケーションで自然と多様性に触れることは、その後の人生にきつと役立つはず。一人の思いが共感を呼び、たくさんのママたちの希望となっているRMJの取り組みがもっともっと広がってほしい。

地域の子どもたちの共感力を育てる、
そしてシニアも元気になる

「ともあそび」を始めませんか？

子どもたちが、幼い頃から地域のいろいろな人と「あそび」を通じて
関わり合う中で、「共感力」を育ていける地域づくりを進めましょう！
子どもと遊ぶことで、シニアも地域もエネル
ギーをもらい元気になれます。みんなで子ど
もたちを育てる地域づくりに、「当財団の『とも
あそび』冊子をぜひご活用ください。



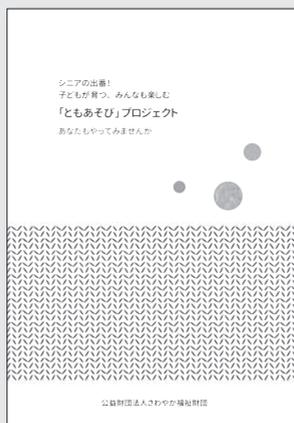
地域シニアが 子どもたちと共に遊ぶ ともあそびへの おさそい

ともあそびの種類や始め
方などを紹介しています。



「どう遊ぶ？」QA

ともあそびの準備、遊び方、
関わり方、言葉かけのポイントから、
注意点や保護者との関わりなどをQ
&A方式で分かりやすく解説して
います。



シニアの出番！ 子どもが育つ、 みんなも楽しむ 「ともあそび」 プロジェクト

あなたもやってみませんか

ともあそびプロジェクトの
提言書です。今、地域でも
あそびを広げる意義、子
どもたちの成長などにつ
いて解説しています。

※当財団 HP トップページ→「ライブラリー」→「各種広報ツール」からダウンロードできます。

◎ お問い合わせは当財団まで ◎

電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会実現のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、多世代協働によるベンチ作り、大学生が運営する子ども食堂、特養ホームの屋上を借り受けての地域住民の園芸活動をご紹介します。なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

福島県郡山市

多世代が協働してベンチ作り
「散歩がしやすい町」を目指す

田村地区第2層協議体

助成金額 9万円

「田村地区第2層協議体」は2020年の立ち上げ以降、「認知症になっても安心して暮らせる田村町」をテーマに、地域住民や関係機関と話し合いを重ねてきました。認知症

サポーター養成講座の開催をはじめ、免許返納講座や子どもの福祉講座など、誰もが安心して暮らせる地域づくりを進めています。



ベンチ製作の様子

24年の協議で、地域商店の減少や公共交通機関の廃止により、移動に不安を抱える高齢者が多いこと、住民同士の交流が希薄になっていることが課題として上がり、「散歩がしやすい町」を目指して休憩できる場所を増やそうと、手作りベンチ製作に挑戦することになりました。

地元企業から木材の寄贈があり、今回の助成金では、ベンチ製作に必要な塗装道具や備品を購入。

普段、地域活動に参加していなかった大工経験者や、SCの助言で夏休み中の児童クラブの小学生も加わり、多世代で協力しながら作業を行い、高齢者と子どもが交流する貴重な機会となったそうです。

完成した4台のベンチは、活動に賛同した地域企業や行政区の集会所に設置されました。さらに、ベンチ製作をきっかけに「世代を超えて一緒に楽しめる活動にも取り組みたい」という声が上がったため、助成金を一部、ポツチャ用具購入にも活用しました。

田村地区では、今後も住民が気軽に交流できる場づくりを進めていくそうです。



つくしよくが実施した子ども食堂の様子

「筑波大生による、みんなの食堂」は、筑波大学の学生を中心に、小さな子どもを育てる家庭や困難な状況にある家庭の憩いの場の提供、近隣の大学生への支援を目的に2023年から活動。毎月第2水曜日に子ども食堂を開催し、多いときには60人近くが訪れ、流しそうめんや射的などの企画も加わり、食事提供だけでなく一緒に遊んだり会話したりするなど、互いに普段関わることのない人同士が交流しています。

茨城県つくば市

人と人をつなぐ、きつかけづくり、
大学生が取り組む子ども食堂

筑波大生による、みんなの食堂（つくしよく）

助成金額 15万円

今回の助成金は、子ども食堂7回分の食材費と消耗品に活用されました。

限られた予算や人手、学業との両立など課題もあります
が、それでも地域からの寄付やボランティアの参加が広がり、「次はいつやるの?」「学生さんがいてくれて心強い」という声に活動の意義を強く感じる

といいます。また、食事の提供は単なる支援でなく、人と人とをゆるやかにつなぐ「ぎっかけづくり」になるということに気づいたそうです。

「助け合いは広げれば広げるほど地域があたたかくなり、子どもたちの笑顔が増え、学生にとっても『地域で生きる実感』が育っていきます」

「今後は、地元企業との連携、学生ボランティアの育成、オンライン広報の強化などで学内外の協力をさらに広げ、大学と地域が自然につながるモデルケースをつくることが目標」と前向きな報告をいただきました。



グリーンクラブの皆さん

京都市京都市

特養ホームの屋上で 地域住民が野菜作りを通じて交流

グリーンクラブ

助成金額 11万9000円

「グリーンクラブ」は、特別養護老人ホームに屋上を提供してもらい、65歳以上の土いじりが好きな人、新たに友人をつくりたい人、何か始めたい人、そして健康を維持・増進したい人が地域から集まり、2024年に発足しました。野菜や果物の栽培、収穫祭などのイベント開催等を通じて地域コミュニティに参画していくことを目指しています。

今回の助成金では、栽培に必要な土や肥料、野菜の苗やプランター等の備品を購入しました。

水やりや手入れを皆で協力しながら行い、収穫祭には地域住民を招待して、育

「地域助け合い基金」 状況のご報告

地域で困り事を抱え、孤立する人たちが全国で増え続けています。引き続き、本基金を通じて皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

(2月15日) 当財団ホームページ開示時点	
◎寄付受付額	437件 2億2259万2637円
このうち遺贈基金より1億8000万円を供出	
◎助成実行額	1398件 2億1128万4749円

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

- 基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、上のコードもご利用ください

基金に関するご意見・お問い合わせ

地域助け合い基金 電話：(080) 9277-4174
担当 FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

てた野菜で作ったポテトサラダやふかししいもを振る舞いました。また、上京区社会福祉協議会には、野菜作り入門講座開催や収穫祭開催時の広報等に協力してもらいました。初年度は、野菜や果物を栽培してみよう/グリーンカーテンを作って特養のご入居者に緑を楽しんでもらおうと

いうことを目標にしてみました。が、今後は、育てた野菜などを地域の人たちに販売し、それで次の種苗を購入して活動するというサイクルをつくりたいというグリーンクラブ。地域とのつながりやメンバーのやりがい、健康寿命の延伸につなげたいと報告をいただきました。

定年、
その先へ

地域とのつながり方

11

一般社団法人定年後研究所所長

池口 武志



（いけぐち たけし）1986年日本生命に入社。本部・現場で長く管理職を務め、多様な人材育成に関わる。2021年定年後研究所所長就任後は、シニア就労促進に関する企業取組、シニアの意識調査に従事。還暦で桜美林大学院老年学修士課程を修了。厚生労働省生涯現役社会の実現に向けた検討会委員、企業から福祉への人材供給に関する調査研究事業検討委員、早稲田大学キャリア・リカレント・カレッジ講師、シニア社会学会理事等を通じて、シニアの可能性の拡がりを志向。

企業人と地域人の本音が交じり合う 「地域プロデューサー講座」の現場から

読者の皆さんは「地域プロデューサー」という言葉から何を想像されますか？ ふるさと納税返礼品の発掘・販促のような経済的側面での助言者を発想されるかもしれません。筆者は、昨年11月から3回シリーズで、認定NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸（CS神戸）とさわやか福祉財団主催の「地域プロデューサー講座」に、講師の一人として参加しました。

ここでの「地域プロデューサー」は「地域の高齢者・子ども・障がい者・外国人などを対象にした助

け合い活動を立ち上げる人を支援する役割」と定義され、その担い手を養成することを目的に据えています。また同時にこの講座では、「70歳代シニア」を社会資産と捉え、その経験や知見、人脈を地域課題の解決に活かしてもらうことで、彼ら彼女らの生きがいづくりに資することも念頭に置いております。初めての試みでもある今回の講座には、地域活動を展開するNPO法人や労働者協同組合、地元神戸の自治会長、近畿圏の自治体職員、そして筆者のような企業人など多彩なメンバーが受講生として参加



「地域プロデューサー講座」 3日目の様子

しました。

講座全体は、CS神戸の代表理事で九州大学名誉教授の星野裕志先生が設計・ファシリテートされ、*ケース・メソッド方式で3回にわたって展開されました。

初回は「定年退職した会社員がいかにして地域活動にデビューするのか？」をテーマに、会社員に必要な意識改革と、地域側に求められる受入のスタンスが議論されました。驚いたのが、

企業人側が「会社員の意識改革の必要性」を、NP O法人や自治会参加者が「受入態勢の整備」をそれぞれ強調し、双方が対立するのではなく、同じ視座に立ったことです。

12月の2回目では、高齢者や子ども園をサポート

するグループの立ち上げ事例をケース・メソッドにして、「事業目的の明確化」「ニーズの引き出し方」「チームビルディング」「予算管理」などの事業化のステップごとに、立ち上げ当事者を支援する立場（II地域プロデューサー）の視点で、必要な要素や心構えを議論しました。

最終回の今年1月では、参加者全員で考え、立ち上げた仮想の地域プロジェクト「水曜日のごちゃまぜ広場」をテーマに、2回目と同様、支援者として必要な支援ステップを議論しました。筆者が強く印象に残ったのは、支援者に必要な資質として、「人材育成力」「思いの共有化」「相談し合える信頼関係」「伴走する姿勢」「傾聴力」「ブレーキもかけてあげる冷静さ」など、日常、企業社会でも重要視されている能力・スキルと見事に重なっていることでした。企業で長年積んできた経験を、地域で活かす「場」を創る地域プロデューサーを養成することの重要性を腑に落として、思いの詰まった会場を後にしました。

*ケース・メソッド：多様な参加者が事例をもとに、当事者として主体的に意見を出し合い結論を導く実践力育成の学習法

助け合いの地域づくりに、 当財団のツールをぜひご活用ください

いつでも誰でも行ける場所を
広げよう！

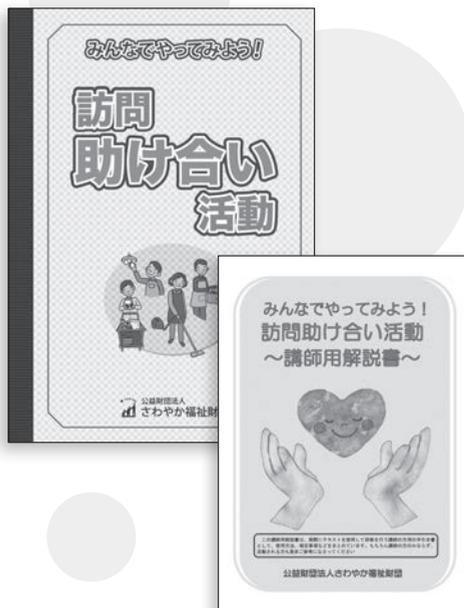
居場所ガイドブック

地域の絆を深め、助け合う関係を広げるための共生型常設型居場所をつくりましょう。居場所のつくり方、事例、活動への支援のあり方など、実践ノウハウが分かるガイドブックです。



みんなでやってみよう！
訪問助け合い活動

お互いさまの気持ちを一歩進めて、自身の生活も、困っている誰かの生活も豊かにする「訪問助け合い活動」。主に高齢者の家の中で行う助け合い活動について詳しく解説しています。講師用解説書もあります。



当財団HPトップページ

「ライブラリー」→「各種広報ツール」から無料でダウンロードできます。

【当財団HP】<https://www.sawayakazaidan.or.jp>

【お問い合わせ】電話 (03)5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。

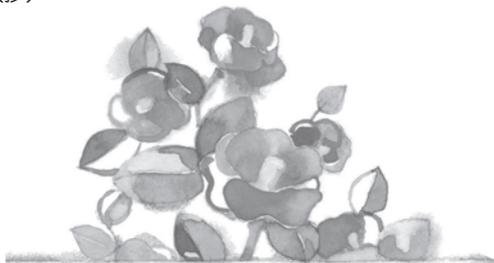
どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **ご支援ありがとうございます。**

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

- **NEWS & にゅーす**

- **さわやか活動日記**（抄）



ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2026年1月1日～1月31日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

さわやかパートナー個人 (40件)

(都道府県別50音順)

岩手県	新井 章子	鈴木 広幸
上関 優	千葉 優	高原 三平
宮城県	川口 清	玉木 康平
氏家 郁郎	小林 雅彦	鳥飼 重和
鈴木 進	笹嶋 貢	雛形 亮我
渡辺 典子	重田 百合子	松下 明夫
山形県	鈴木 美智子	柳 久美子
高橋 寛人	館 里枝	山谷 恵美子
栃木県	滑川 里美	吉田 信正
大島 裕子	藤本 裕一郎	神奈川県
群馬県	東京都	上田 利枝
高橋 恵理	金城 清	小山 俊司
角田 修一	佐生 綾子	平井 昌利
埼玉県	鈴木 宏量	圓山 賢吾

新潟県

須田 貴子

石川県

安嶋 是晴

静岡県

花山 勝重

原章

愛知県

森 貞述

広島県

吉原 寛

福岡県

石井 久光

さわやかパートナー法人 (1件)

株式会社エーシーエ設計

一般で寄付 (1件)

財団職員有志一同 (1万1187円)

地域助け合い基金で寄付 (1件)

(ご寄付日付順)

いきがい・助け合い
オンラインフェスタ2025一同
(145万円)

※チャリティーフェスタとして開催した「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2025」の参加費と同額を地域助け合い基金に拠出いたしました。皆様のご参加に感謝申し上げます。



NEWS

& にゅーす



「連合・愛のカンパ」 助成先が決定しました

立ち上げ支援プロジェクト

さわやか福祉財団では1997年より、日本労働組合総連合会（連合）組合員の皆様のカンパによる「連合・愛

のカンパ」を原資として、地域におけるふれあい・助け合い活動の団体立ち上げや新規事業の開始を初期運営資金面から支援しています。

今年度は、昨年10月10日から11月30日までの期間、当財団ホームページでの告知に加え、全国の社会福祉協議会や各地のNPOセンターのご協力を得て募集を行い、28都道府県83団体からご応募いただきました。

応募の内容を見ると、多世代交流、障がいのある方や子どもの居場所・食堂づくりなどの活動を始めようとする団体からの応募が多く寄せられました。また、移動支援や多世代交流の活動を立ち上げた団体からの応募もあり、前回に続き、全国の生活支援コーディネーターから推薦を受けた団体の応募も増加しています。

選考の結果、今年度は20団体に対し、総額247万2000円の助成を行う



ことを決定しました。助成先の名称および所在地は、次ページに掲載しています。

四半世紀を超える長きにわたり、継続してご支援いただいている連合組合員の皆様に、あらためて深く感謝申し上げます。

また、全国各地で活動されている応募団体の皆様に心から敬意を表しますとともに、今後のさらなる発展をお祈り申し上げます。

（大石 敏晴）

2025（令和7）年度 「連合・愛のキャンパ」助成20団体

- Fun time（ファンタイム）（北海道恵庭市）
- 「みんなの広場食堂」（福島県国見町）
- 北橋地区地域助け合い活動推進協議体 たちばな支援の会（群馬県渋川市）
- 本泉ささえ愛の会（埼玉県本庄市）
- 認定NPO法人 こっこつ（東京都新宿区）
- 特定非営利活動法人 まちのかぜ（神奈川県大和市）
- 海峰苑移動支援の会（静岡県伊東市）
- そよそよの家（静岡県浜松市）
- まなびとあそびば（静岡県磐田市）
- おもちゃの広場 ひよこまめ（愛知県名古屋市長古屋市）
- パール・キッズ・クラブ（三重県伊勢市）
- NPO法人おさかレモネードスタンドプロジェクトPiliina（大阪府豊中市）
- OTC（太田体操クラブ）（大阪府茨木市）
- 特定非営利活動法人 つなげる里山ネットワーク（兵庫県神戸市）
- COMMONS 山芦屋（LET'S COMMONS）（兵庫県芦屋市）
- 一般社団法人みんなの実家（鳥取県鳥取市）
- みんなのガーデン（島根県邑南町）
- 特定非営利活動法人ひまわりとたんぼぼ（徳島県北島町）
- まーる（香川県高松市）
- 特定非営利活動法人 南伊予まちづくりネットワーク（愛媛県伊予市）

■都道府県別応募と助成状況 ●応募：28都道府県 83団体 ●助成：16都道府県 20団体

都道府県名	応募	助成	都道府県名	応募	助成	都道府県名	応募	助成	都道府県名	応募	助成
北海道	2	1	千葉県	1		岐阜県	1		和歌山県	1	
岩手県	1		東京都	11	1	愛知県	3	1	奈良県	3	
宮城県	2		神奈川県	6	1	三重県	2	1	鳥取県	1	1
福島県	1	1	静岡県	4	3	滋賀県	2		島根県	1	1
群馬県	1	1	富山県	1		大阪府	21	2	高知県	1	
埼玉県	4	1	石川県	1		兵庫県	5	2	徳島県	1	1
合 計										83	20

さわやか活動日記(抄)

各地・各事業の取り組みをご紹介します

ふれあい推進事業

「山城地域生活支援体制整備事業 担当者情報交換会」開催 保健所圏域内の小規模自治体が情報交換

■京都市

〔1月19日〕京都市山城南保健所圏域内（井手町、宇治田原町、笠置町、和束町、南山城村）の行政機関、地域包括支援センター、社会福祉協議会のいずれかに所属するSCと生活支援体制整備事業担当者を対象に、「山城地域生活支援体制整備

備事業担当者情報交換会」が開催された。

本情報交換会は2024年度より年2回開催されており、当財団も協力している。今回の情報交換会は、山城南保健所圏域内の人口1万人以下のSC・自治体職員の間で活動状況に関する

地域支援事業の活動報告は、このほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

SC生活支援コーディネーター

る情報交換を行い、ネットワークの深化を図るとともに、各自治体において取り組める具体的な方策を検討するために開催された。参加者は、SC・行政職員11名、京都市・保健所関係者7名。

山城南保健所所長のあいさつに続き、財団から話題提供として「全国における取組の工夫」と題し、小規模自治体における事業の実践事例を紹介した。

次に実践報告として、株式会社アグティより、「アグティが育む地域のつながり」

り「これからの社会のあり方」と題し、京都市久御山町の商店街の一角で展開している活動「ACWAB ASE」について報告があった。医療施設や高齢者施設等の洗濯物をたたむ仕事を通じた参加の場づくりの取り組みで、「いつ来てもいい、いつ帰ってもいい」「誰が来てもいい」「多く働いてもいいし、おしゃべりだけでもいい」といった自由度の高い参加形態が特徴。また、参加者同士が買い物に出かけたり、常連の参加者が来所しないときに



京都府「山城地域生活支援体制整備事業担当者情報交換会」の様子

は自然に安否確認が行われたりするなど、活動を通じて住民同士の支え合いも生まれていることが報告された。

その後、参加者全員による質疑応答と意見交換を実施した。

財団からはまとめとして、小規模自治体だからこそ顔の見える関係性を生かし、地域の特性を踏まえながら取り組みを進めていく重要性について共有し、参加者にエールを送り総括した。

終了後アンケートでは、「他市町村の事例を聞くことで、自治体の課題に目が向き不安を感じることもある

が、小規模自治体だからこそ悩みながらも地域のつながりを形にしていることを実感できた」「他自治体の取り組みを知る貴重な機会となった」「実践報告から新たな視点を得ることができ、有意義だった」「交流の場があることで安心感につながった」などの意見が

寄せられた。また本情報交換会について、山城南保健所のバックアップの下、「今後も継続してほしい」「継続して参加したい」と全員が回答した。

今後もこの取り組みを継続して支援していく。

(目崎 智恵子)

2回目のフォーラム開催

住民が主体的に話し合い 第1層協議体充実につなげる

■開成町（神奈川県）

〔1月22日〕開成町は第1層S・Cと協議体の体制をつくり、自治会と連携しながら助け合いの地域づくりを推進してきた。今年度、神奈川県のアドバイザー派遣を活用し、その核となる行

政、町社協、第1層S・Cらコアメンバーに、県とアドバイザーとしての当財団も加わり、これまでの振り返り（成果や課題）と、今後に向けて第1層協議体をさらに充実させていくために

どうしたらよいかについて話し合いを重ねた。

そこで、多くの住民へ働きかけるフォーラムを開催し「支え合いのまちづくりの必要性」を理解してもらい、主体的な参加を呼びかけ、第1層協議体を充実させていくことを目的に取り組むことになり、準備を進めてきた。

フォーラムは2回に分けて開催し、1回目は昨年12月2日に行い50人ほどの住民が参加。2回目はこの日開催し、40人ほどの住民が参加した。周知をどうするかについても議論し、さまざまな広報にも取り組んだ。

1回目の当財団の講演では、「なぜ、助け合いが必要か」「SCと協議体の役

割」「目指す地域像とは」

「さまざまな助け合いの事例紹介」を伝え、参加者が熱心に聞く姿が印象的だった。この日の講演は「協議体ってなあに？」と題し、全国のいくつかの協議体における具体的な取り組みを紹介し、その役割や機能を伝えた。主体的な住民が「自分事」と感じ、話し合いを重ねる中で気になることややってみたいことを出し合って動き出したり、若い世代にも声をかけて話し合う機会をつくるなど、全国的事例でイメージをつかんでもらった。

次に行った「助け合い体験ゲーム」はやはり大変盛り上がり、一気に話しやすいう雰囲気広がった。

グループワークは、1回目

は、1回目に続き今回も第1層協議体メンバーがファシリテーターを担った。主体的な参加者が多く、活発な意見交換がされていた。

「開成町をもっと良くしていきたい」「シニアが1歩下がり、若い世代などと一緒にみんなで話し合っていきたい」「さまざまな活動のネットワークをつくっていきたい」「自治会との連携も大切」など、前向きでまち全体を視野に



開成町で行われたフォーラムでの「助け合い体験ゲーム」の様子

入れた意見がたくさん出され共有する機会となった。その根底には開成町が大好きで、まちを誇りに思う

「地域愛」があることも感じられた。

1回目のフォーラムの様子から、コアメンバーは今後、居場所や生活支援、移動支援等の分科会のようなものをつくり、第1層協議体と共にそれぞれの活動を広げていく動きになっていくイメージだったが、今回

「地縁再生フォーラム」開催

「目指す地域像」を皆で考え、今後の活動に生かす

■ 稲沢市（愛知県）

【1月24日】名古屋市のベッドタウンでもある稲沢市は、2017年から協議体の体制づくりを進め、第2層協議体が立ち上がり地域づくりを進めてきたが、メンバーの固定化などさまざま

のフォーラム後の振り返りでは、「話し合いの場」を求めている住民が多いということが分かった。3月16日に行う第1層協議体をどのように進めていくのか、振り返りの意見も踏まえながらコアメンバーで検討し、進めていく。（鶴山 芳子）

まな課題も出てきている。

事前にSCらとオンラインで打ち合わせを行い、行政が住民に「共に地域づくりを進めていきたい」と呼びかけたり、ワークショップで「目指す地域像」を話

し合っており、提案しうかと提案した。

この日、市民を対象に「稲沢市地縁再生フォーラム」を開催。協議体メンバーに生活支援

体制整備事業の狙いと有用性を理解してもらうこと、また、フォーラムで新たな人材発掘につ

なげ、事業継続のための人材ネットワークを広げることとを目的とした。

行政からは「稲沢市地域福祉計画 地域福祉活動計画」の資料が配布され、市



活発な議論となった「稲沢市地縁再生フォーラム」でのグループワーク

の現状として高齢者のいる世帯数の推移、児童や外国人登録人口の推移、市の課題である「コミュニティの希薄化・地域の担い手不足」「孤独・孤立」について説明。また、基本理念で

ある「地域みんなで作る、安心して暮らせるまち」、市の施策などが紹介された。

財団の講演は「みんなで作えよう！ 地域での支え合い」というテーマで行った。最初に「高齢になって暮らしたい」という多くも住み慣れた地域で安心して暮らしたい」という多くの住民が望むことは、行政もそういう地域をつくりたいという同じ思いであること。立場が違うことを理解し合い、住民はどうやって地域をつかっていくかを自分事として考え、住民と共に行政が地域づくりを推進していく覚悟を持つことが大切であると伝え、「なぜ、助け合う関係が必要か」「SCCと協議体の役割」に触れ、「協議体は何をする

のか」について全国の事例を交えながら紹介した。そして本題である「目指す地域像とは」「全国のさまざまな助け合いの事例」を紹介し、グループワークにつなげた。

グループワークのテーマは「目指す地域像を考えよう」。「①住み慣れた地域で暮らすためどんな地域にしたいか」「②必要な助け合いは何か」について、第2層SCCや包括職員がファシリテーターとなり、第2層協議体ごとに話し合った。

活発な議論となり、発表も積極的でたくさん手が上がった。「気軽に声かけができるまち」「居場所があるまち」「子どもから高齢者まですべての世代が一体と

なるまち」など共生のつながりの必要性が出され、若い世代や子育て世帯などと一緒に、という声も多かった。「近所づきあい」「居場所」「移動支援」「つながり」「助け合い」「普段のつながりからの防災」などさまざまな活動の必要性も共有された。

終了後アンケートの結果

「ささえ合い講座」2日間開催 地域の活動を知り、活動への第一歩につなげる

■ 紀北町（三重県）

紀北町では2023年度から住民の活動参加へのきっかけづくりとして「ささえ合い講座」が開催されている。この間、講座に参加した有志の住民によって、

を基に、次の第1層協議体では「交流の場」について意見交換・情報共有をしていくとのこと。第2層協議体においても、アンケート結果を今後の地域活動のヒントにしていくとのこと。今回のフォーラムが具体的な動きにつながっていくことを期待したい。

（鶴山 芳子）

地域のこれからの考える「みらい塾」と、地域活動を実践していく「ささえ合いサポーター会」が生まれている。3年目となる今回は、活動者のリアルな想い



に触れて、自分事として考える機会とする2日間のプログラムになっている。

【1月24日】この日は第1回で、『ささえ合いのまちづくりフォーラム』と題して開催され、町民や民生委員、地域ボランティアなど約80名が参加した。町内の活動者3名からの実践発表とパネルディスカッションを実施し、当財団がコーディネーターとして進行を担当した。

最初の発表は、阪神・淡路大震災をきっかけにできることから始めようとスタートした「ボランティアみやま」の代表・津村良香氏。「皆で協力する気持ちがあれば何でもできる」と報告。次に、趣味の会の施設訪問

から今では出張サロンや地域食堂の開催に発展している「大正琴 野菊の会」代表・西田勝美氏。「ボランティアをするようになって

ますます元気になっていく」と話した。最後に、男の料理教室から菜園ひろばにまで活動が広がっている「だいこんの会」代表・岡村哲雄氏から「楽しく交流するだけで効果がある。町内のあちこちに広げたい」と報告され、多くの参加者の共感を呼んでいた。

また、会場の一角では、ボランティアみやまによるミニバザーも開催されており、休憩時間は和気あいあいとした雰囲気に含まれていた。

パネルディスカッション

では発表者3名に「活動時の苦勞と乗り越える方法」

「どう仲間を増やしているか」などについて質問し、「苦勞よりも楽しみが多い」「1人ではなく仲間の存在が大事」「楽しみながら活動することで自然と仲間は増えていく」などと回答があった。

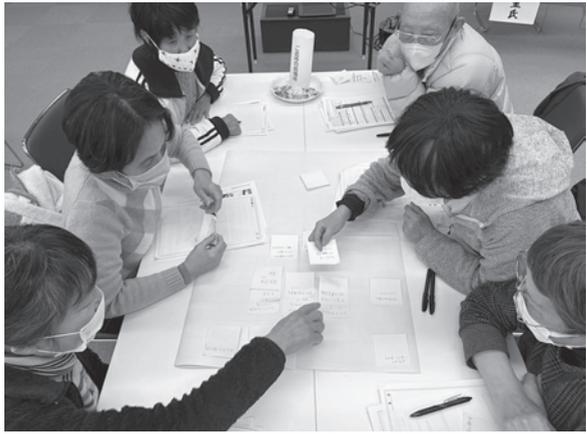
参加者は皆、熱心な面持ちで時折うなずきながら耳を傾けており、終了後には「3団体の活動内容が素晴らしい」「ボランティアが元気の秘訣だと分かった」などの声が聞かれた。

最後に財団から「発表者3人は決して特別な人ではない。一歩踏み出すことで仲間が集い、想いが実現した身近な事例といえる」と

まとめて、第1回が終了した。

【1月29日】この日は第2回。第1回の事例発表で感じたことを踏まえてグループワークを行い、参加者の「自分にもできることがある」という気づきを得ることで、活動への第一歩とする目的で開催された。参加者は70〜80歳代を中心に45名ほどが集まった。

最初に第1層SCの山口淳氏から第1回の振り返りと紀北町の取り組みについて報告。続いて財団から「みんなのでつくる地域のささえ合い」と題して、ささえ合いの意義や効果、具体的な取り組み方法について説明した。次に、地縁活動ご近所の居場所、有償ボラ



熱気に包まれた紀北町のグループワーク

ンティア、移動支援の4つの活動について「近くに現在あるか、欲しいと思うか、活動づくりを手伝うか」を上手い格好で答えてもらいグラフ化する紀北町版「助け合い見える化チャート」を行

ヤートで確認した4つの活動の中の1つを選び話し合った。発表は当初3グループ程度の予定だったが、会場の熱気に後押しされ、終了時間を延長して全6グループからの発表となった。

った。その結果、4つの活動すべてにおいて「活動づくりを手伝う」が「欲しいと思う」の人数を上回り、特に地縁活動、居場所、有償ボランティアは参加者の9割が「手伝う」に挙手するという前向きな姿勢が浮かび上がった。グループワークでは、見える化チ

「まずは声かけから」「空き地を活用した居場所ならできるかも」「目的、役割があることで住民が動き出す」など、前向きに取り組んでいこうとする発表が多かった。財団からは「『活動するべき』と押し付けるのではなく、目的を共有することで協力者が増えてい

く」と伝えた。今後は、今回関心を持ってくれた参加者と、すでに活動している「みらい塾」「おさえ合いサポーター会」を中心とした第2層協議体を編成し、ささえ合い活動の拡大に向けてより一層取り組みを推進していく。(高橋 望)

永福和泉地域区民センター協議会 「地域懇談会」開催 「つながり」をテーマに地域づくりを学び合う ■杉並区(東京都)

【1月26日】永福和泉地域区民センター協議会主催による「令和7年度地域懇談会」が開催された。同協議会では、地域の関係者が顔を合わせ、地域の課題や想

いを共有する機会として、毎年地域懇談会を実施している。「地域区民センター協議会」とは、杉並区とパートナーシップを結び、区内7

か所の地域区民センターを拠点に活動するボランティアによる任意団体であり、町会・自治会、商店会、小中学校PTAなど地域団体からの推薦者や公募委員によって構成されている。当日は、町会・自治会、商店会、小中学校の校長とPTA、青少年育成委員会、民生委員児童委員協議会、包括、社協など、地域の多様な団体から約70名が参加した。

当財団の講演のテーマは「つながり」とした。その背景には、昨年度の意見として挙げられた、働く現役世代やマンション居住者が町会・自治会活動に参加しにくい現状があり、地域人材の減少、若い世代をどの

ように地域活動に取り込むかといった課題意識がある。それらを踏まえ、つながりづくりや居場所の重要性を学ぶ機会とした。

また杉並区から、区が進める支援事業「町会・自治会もう一歩すすめ隊」「すぎなみプラス」が紹介された。

後半には、地域課題と課題解決に向けた居場所づくりへのグループ意見交換が行われた。続く発表では、地域への関心の薄さや顔見知りが少ない現状が指摘され、地域課題を自分事として捉えにくい状況が課題として共有された。その一方で、情報を共有できる場や、子どもから高齢者までが立ち寄れる駄菓子屋のような

居場所への期待が語られた。また、町会等における役員不足への対応として、役割を固定せずイベントごとにサポーターを募る柔軟な参加の仕組みや、集まれる場所として、高齢者施設や学校、空き家の活用可能性についても議論が交わされた。

さらに、町会加入者や行事参加者の減少、情報伝達の難しさといった課題に対し、LINEの活用など新たな手法や、すでに行われている近隣住民同士の交流や助け合いの実践例も共有され、子ども食堂や駄菓子屋と高齢者との連携による世代



活発な意見交換が行われた杉並区の「地域懇談会」

間交流、地域内の利用可能な場所を見える化し、マッチングを通じて人や活動をつなぐ取り組みの重要性等が提案された。

グループ意見交換は活発に行われ、参加者それぞれが地域の現状や可能性について率直な意見を交わしていた。

県主催

「SCスキルアップ研修会（応用編）」開催 多様な主体等をテーマに事業推進のノウハウ学ぶ

■山梨県

【1月28日】山梨県主催

「SCスキルアップ研修会（応用編）」が開催され、

県内のSCや保健所など約25名が参加した。テーマは「多様な主体の連携」。各

住民主体の団体が懇談会を主催し、建設的な議論がなされた点は大きな成果である。今回の懇談会が、地域における共通理解の醸成や住民意識の底上げにつながり、今後の地域づくりの具体的な取り組みへと発展していくことを期待したい。

（岡野 貴代）

市町村および生活支援コーディネーターが、それぞれの地域の実情を踏まえ、生活支援体制整備事業を効果的に進めていくために必要な視点、知識、技術を学ぶ

ことを目的とした。当財団は、多様な主体の連携について考え方や手法、事例を紹介した。

県から「多様な主体との連携について」「県内の取り組み事例について」「包括的支援事業を活用した地域づくりの推進について」等の説明があり、続いて財団より「これからの地域づくりー多様な主体とのネットワークをどう進めていくかー」と題して講演。事前アンケートを基にした組み立てと多様な主体の連携を進める上でのポイントと取り組み提案として「情報交換会」を紹介。また、「生活支援体制整備事業

10年の成果・課題とこれから」「住民主体の地域づく

りはなぜ難しいか」「ニーズと担い手の掘り起こし」「発想の転換」「多様な主体の連携」「連携のポイントはニーズ。住民の声や地域の暮らしを企業など関係者が共有すること」「連携の方法としての情報交換会」「楽しい」は継続する」「モチベーションアップの機会をつくる」等の内容で話をした。

事例発表は、同県富士川町の買い物支援。買い物支援に取り組むためのアンケート調査、地域ケア会議での検討、買い物ツアアの説明会、要支援者へのアンケート、お試しなど、具体的なプロセスが分かりやすく発表された。

グループワークのテーマ

は7つ。「①生活支援体制整備事業の管内の状況（協議体や支え合い活動など）」



山梨県「SCスキルアップ研修会（応用編）」での財団の講演の様子

「②情報収集の方法（地域資源・地域のニーズ・他自治体の事例）」「③多様な主体と連携した取り組みについて（連携している団体取り組み内容）」「④令和7年度生活支援体制整備事業の改正点について（包括との連携）」「⑤今回の研修での気づきや学び」「⑥普段の業務内容について」

「⑦フリートーク（ざっくりばらんな情報交換）」からグループごとに2つ選んで55分間話し合われた。

発表ではさまざまな課題を共有した。まとめのコメントで財団から「共有した課題に対するノウハウを自分の各地域で生かし、行動してみよう」と呼びかけた。また、住民が主体的に地域

づくりに参加してこそ地域共生社会が実現できること、そのためにも「なぜ助け合いが必要か」を伝え、実感して行動する住民を見つけていくことがSCの役割として重要であることなどを伝えた。多様な主体については、既存のさまざまな活動団体や連携できそうな組織・企業等に声をかけ、みんなで顔を合わせる機会をつくり、同じ方向を見て情

報交換会を開いてみる、世代や属性、視野を広げてみるなどでは、と提案した。山梨県は協議体が広がり、協議体による主体的な住民の話し合いや地域づくりが浸透している。それを生かして、住民でできること、住民だけではできないことを多様な主体と連携して進められるのではないか。

（鶴山 芳子）

社会参加推進事業

CS神戸・当財団主催「70歳代シニアを応援する地域プロデューサー講座」3日目開催

【1月9日】認定NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸（CS神戸）と当財団が主催する「70歳

代シニアを応援する 地域プロデューサー講座」（全3日間）の最終回3日目が開催された。参加者は、行

政、NPO法人、労働者協同組合、ワーカーズコープ・センター事業団、自治会から7団体7名。

前半は、2日目に2グループより各グループ内で1つ選んだ助け合いプロジェクトを、立ち上げる当事者として計画書を作成し発表。後半は、選ばれた1つのプロジェクトについて、支援者（プロデューサー）として立ち上げ支援計画をグループごとにまとめて発表。参加者全員で講評し合い、受講者がそれぞれ今後、地域をプロデュースするためのポイントを理解し共有した。

参加者からは、支援者として必要なポイントとして、傾聴力・洞察力・必要な知

識と提案力・他団体や企業を巻き込む力などが挙げられた。

結びにCS神戸の中村順子理事（ファウンダー）より、地域をプロデュースする支援者として押さえるべき「課題解決グループ養成のための10のステップ」として、①支援者は日常的に地域の課題・ニーズの情報を把握に努める ②地域課題を講座・研修の題目にして設計する ③講座の中で仲間づくり ④行政データ、市民両面からの地域調査、施策調査 ⑤企画書作成（誰のために何をするのか） ⑥試行・関係先との調整（経費と活動の整合性） ⑦事業計画作成（総量・回数・人数・単価・金

額・時期など明記） ⑧組織づくり（リーダー含む3人のトライアングル） ⑨事業本格実施（助成金・マスコミ紹介） ⑩事業評価への陪席 が挙げられた。

地域をプロデュースする支援者が押さえておくべきポイントを学ぶことで、課題を抱えている当事者の目線を理解し、その当事者にとって最も効果的なアドバイス、支援策の優先順位を理解することも大切なポイントであると理解した。ま



情報・調査事業

「かながわ協働推進協議会」に出席

【1月15日】神奈川県主催「令和7年度第2回かながわ協働推進協議会」が開催

た、大切なことは、当事者自らが責任を持ってやりたいうことを成し遂げるための気づきと、行動変容への支援であること。そのために、プロデュースする支援者として必要な知識、知見、学びのポイントも参加者それぞれの立場で違うことを理解すること。

本件は2月にCS神戸と財団で振り返りを行い、今後の対応を検討する。あらためて報告したい。

（玉置 英明）

され、委員として出席した。山下芳彦政策部長のあいさつに続き、中島智人委員

長（産業能率大学経営学部教授）の進行でさまざまな立場の委員の皆さんと議論した。協議事項は、①前回協議事項の振り返りと経過報告（令和7年度第1回「NPO支援策について（今後の支援策の方向性等）」）、②ボランティア団体等の人材の確保及び育成

①については事務局より議事録を基に説明があり、あらためて共有した。②は神奈川県内のボランティア団体でも大きな課題となっている「担い手不足」について、その確保と育成をどうしていけばよいのか活発な議論となった。

議論のきっかけにと指名をいただき、当財団としてプレゼンテーションを行う

た。1つは、全国の自治体と連携して取り組んでいる地域づくりや助け合い活動団体の中での「担い手不足」という共通の課題などの現状と、それに対する取り組みや考え方の紹介。例えば「後継者については考えないほうがよい」という発想など。また、地域助け合い基金の狙いや仕組み、現状等も紹介した。

その後に行われた中島委員長との進行によるフリーディスカッションはいつもながらとても活発で、さまざまなアイデアや意見が出された。例えば「20〜30代に刺さるショート動画を作成」「ボランティア実践交流会の定期開催」「シニアの力を生かす機会…新現役

交流会」「NPO活動をアピールする場」「企業のOB会へのメール発信」「支援者間ネットワーク」「ミッションに向けて仲間をつくる」「学生のときの体験」

等。また、「受け入れる側の力量の形成」という意見も出た。これらの意見が県の取り組みに生かされていくことを期待したい。

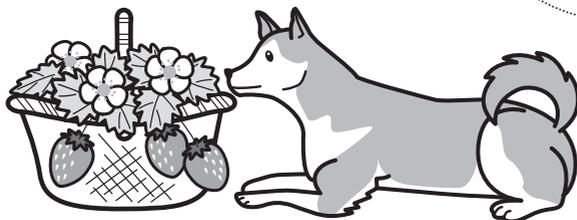
（鶴山 芳子）



事務所 事だより

●情報誌の編集作業上、素材サイトでイラストを探すことがある。先日ふと思いついて、A1に「地域コミュニティ」「シニア」「助け合い」等のキーワードで画像をリクエストしてみたところ、私の伝え方の問題かアチャラ側の問題かは不明だが、A1は盆踊りのような画像を出してきた。確かに分かりづらいテーマだったと思うけど、それにしても…。これからもみんなので、ふれあい・助け合いをしっかりと広げていこう！

みんなの広場



こんな時代こそ
支え合い助け合い

匿名希望さん

諸国の状況をみても、「自分さえ良ければ」の風潮が主流になってしまっているのではないかと不安です。こんな時代だからこそ支え合い助け合う社会をつくっていききたいです。

まさにその通り、共感を地道に広げてすすめていきましょう！

もっと若い人たちに
参加してもらうには

匿名希望さん

「自己責任社会」といわれて久しいですが、これから人口が減少し、社会全体が縮小する中では、助け合い

投稿募集

『さあ、言おう』は皆様の声を社会につなげる問題提起型情報誌です。
ぜひ皆様の声をお寄せください。

〒105-0011 東京都港区芝公園
2-6-8 日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団
『さあ、言おう』編集部宛
FAX: (03) 5470-7755
E-mail: pr@sawayakazaidan.or.jp

送付先

がなければ成り立たないことが多くあると思います。
「さあ、言おう」を拝読するたび、もっと若い人たちにこうした活動に参加してもらおう方法はないか考えてまいります。

助け合いの価値や楽しさを押し付けてなく自然に感じられるように。そんな場や機会づくりを工夫しながら発信していけるといいですね。

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます(さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です)。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。ただし、窓口にて現金(硬貨)でお振り込みいただく場合は、ゆうちょ銀行所定の取扱料金がかかる場合がございます。

*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。
電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

表紙絵から はり絵・池田げんえい



「早春」

編集後記 ●「活動の現場から」は、静岡より。泉の会の活動は一貫して、目の前の人たちに“つき合う”ことから生まれてきました。同じ空間でみんなが過ごす居場所を取材しました(P4~)。●「子どもと一緒に地域で輝こう」は、外国人居住者が増えている東京の下町で、日本人と外国人のママ・パパたちが出会い、仲良くなって支え合う取り組みです(P10~)。●「連合・愛のカンパ」の助成先が決定しました。連合組合員の皆様に感謝申し上げますとともに、新しい取り組みが広がるようお祈りいたします(P25~)。

助け合いを
広げよう!

新
ひとりごと

丹 直秀

友だちことば

「おはようございます」より

「おはようさん」

「そうですねえ」より

「そうねえ」

近所づきあいでのやりとりでは

ことばづかいが

意外と大切な潤滑油になる

友だちことばが何気なく

使えるようになると

その地域の仲間になれた

実感が湧いてくる



- 公益財団法人さわやか福祉財団理事
私の毎日の近所づきあいは朝のラジオ
体操会から。10人ほどが増えたり減っ
たりですが永年続き、近隣の貴重なつ
ながりの場となっています。

さわやか 3月号

通巻391号 2026年3月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい

編集担当 塩瀬潔泉

取材協力 七七舎

イラスト 福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子

発行元 公益財団法人さわやか福祉財団

〒105-0011

東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階

Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755

E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp

<https://www.sawayakazaidan.or.jp>

Printed in Japan

いつもご支援を ありがとうございます

さわやか福祉財団は、皆様のご寄付によって活動しています。
ご寄付は、さわやかパートナー（賛助会員）、
1回ごとに金額をお決めいただける一般ご寄付、
遺贈寄付、地域助け合い基金など
さまざまな形でお受けしています。
どうぞよろしくお願い申し上げます。

誰もがいきいきと暮らせる地域共生社会をつくりましょう



個人会員、企業・団体等の法人会員ともに、
どなたでもお申し込みいただけます。
税制優遇措置もあります。

詳しくは、本文40ページおよび財団HPトップページ→
「参加のお誘い」→「寄付で応援する」をご覧ください。
財団HPからもご寄付いただけます。
【財団HP】 <https://www.sawayakazaidan.or.jp>

■ ご寄付全般に関するお問い合わせ ■
電話 (03) 5470-7751
メール mail@sawayakazaidan.or.jp